パンタナール通信

南北米福地開発協会　会報　２００９年１０月１日　７３号

第九回 国際協力青年奉仕隊活動報告

８月２５－９月１０日　ディアナ村、エステ市にて

エステ市の５０の学校に１００本の苗木を現地の学生と協力し植える。全体で５０００本（９月４日）

サンドラ　ザカリアス　エステ市長は『長い歴史の中でたくさんの困難を乗り越えてきた日本人の勤勉さには本当に尊敬する。今回の活動を通して私たちの子供たちや後孫の未来を保障してあげたい』と語った。また『この活動がシウダ　デル　エステの青年たちが自然の大切さを自覚する第一歩となるよう最善を尽くさなければならない。特にこの姉妹国との友情や協力の絆をより強くしていかなければならない。』と付け加えた。南北米福地開発協会副会長、佐野道准氏は流長なスペイン語で『私たちは植物を愛し大切にし、自然を尊重しなければならない。私たちは世界中の青年たちと大きな相互協力の輪を作り上げていきたい。二〇世紀は戦争と暴力の時代であったが、二十一世紀は平和と調和を生み出す時代である』と語った。

全体の植樹の初めにザカリアス市長と日本から青年奉仕隊を率いてきた柴沼南北米福地開発協会　日本事務局長が記念の植樹を行った。

ディアナ村での植樹、学校のペンキ塗り、文化交流活動

壁のペンキ塗り（島田）

大きな栗の樹の下にの歌を教える（小野寺）

折り紙を教える（岩田）

パラグアイ川の中で子供達と交流する（大友）

村の中央通りに植林をする。（西）

『学校周辺の植林、午後には村の街路樹を植えていきましたがその時は子供達が良く働いてくれて、日本の子供達に見せてやりたいと本気で思いました。勤勉で良く働き素直で話をよく聞くのが日本人の国民性だったらしいけれども今は間違った教育でそういった精神が失われてしまった。地球の反対にはこんなに純粋な人々がいるのだということをぜひ知ってもらいたいと思いました。土はコンクリートのように固くシャベルを拒み続け、掘り終えても土壌改良をする作業があり、最後にやっと植えることができる。二百か所以上も準備することがどれほど大変な事か分かり、自分自体が多くの投入の上に存在しているのだと言う自覚とそれに対する感謝、そして恩を返したいと気持ちでいっぱいになった三日目でした。』

大友浩介

『実情は本当に大変なことも、生活していく間に感じることが出来ました。川の水を飲み、家畜とともに川に入り、ボール遊び以外に遊び方を知らず、固い土地で、はだしで走る子供達の姿と、何もすることのない大人達とでした。スコップを持って大人が一―二時間穴を掘ってようやく一本の樹を植えられるそんなに固く痩せた土地でした。掘り返せば石のように転がる土でした。村での生活は思う以上に大変でした。はじめは心身ともにやる気で満ちているのに日を追うごとに体が動かなくなり、心がしんどくなりましたが最後まで頑張ることが出来ました』島田周三

『みんなのキラキラした顔を見ながら、改めて“人類一家族”という言葉がリアルに心に響いて来ました。貧しくて学校に学ぶことや、きれいな水を飲むことさえままならない生活をしている子供達と、食べ物を平気で捨てている日本。同じ地球に生きているのに、この差の中で生まれ育ち、お互いを余り知らずに生きている。

先進国にいる私達、現実を知るための努力がまず第一歩だと感じました。今回、私達はディアナ村に行くことでその現実をたくさん知りました。』

小野寺結香

『ディアナでは、川の水を飲んで少し体調を崩してしまいましたがとてもいい思い出になりました。特に何もない（物質的には）所でしたが、子供達は生き生きとしているし、無邪気でかわいすぎてたまりませんでした。

子供達といると、自分でも素直になっていくのがよくわかったし、純粋に喜び感動する姿勢を持たなきゃいけないなぁと思いました。』

森山聖美

『ディアナでの村の人々とともに歌ったり、木を植えたり、遊んだりする中で、小さいけれど強くたくましく、そして優しい彼らは、教育をもって、素晴らしい世界的リーダーにもなれると感じました。人の痛みが分かり、助け合うことの大切さを知る、積極的なために生きるリーダー。

可能性を発揮できる環境をつくってあげるために私に何が出来るか、考えたいと思います。』

西礼子

校長先生からプレゼントを（東）

川から水を運び苗木に（田中）

苗木を植える穴掘り（森山）

子供達に歌の振付を教える（安保）

粘土層の土地に植樹のマウンド作り（渡邊）

『第一印象は、本当に家族のように歓迎して下さって。本当にために生きるのが自然な人たちなんだなぁと思いました。

一緒に植樹をしたり、遊んだり、歌を歌ったり。一つ一つがとても印象的で、植樹をする時も中学生や高校生がたちが涙と汗をかきながら集めた切手によってこのプロジェクトが支えられていると思うとゾクゾク、本当に彼らが直接ここに来て、一緒に活動したいと思いました。』

岩田有香

『ディアナ村でもスケジュールを聞いた時点ではもっとガツガツ奉仕しようとして来たのに、結構、文化交流の時間も長くてどうなのかなぁという感じもあったのですが実際にディアナで生活して見て、現地の方々と交流しながらやって行くことが大切なんだと思いました。ただ自分たちだけがストイックにガツガツ奉仕をしてきても、現地の子供たちや人々に私たちの願う内容を伝えることはできないんだと言うことを強く感じました。ために生きるということがただ単に奉仕だけすればいいと言うのでなく、ともに働き、ともに遊び、ともに生活して行くことだと思いました。』

安保幸輔

『ディアナで三日目から体調を崩していくなかで、元気な時はディヤナ村での生活は特に苦には感じませんでしたが体がきつくなって、初めて普段どれだけ恵まれた環境の中で生活させていただいているかを感じました。』

東興一

『植樹の重要性、効果、この活動を通して自然を愛すること、ために生きることを学びました。

子供達はもう本当に元気で驚きました。サッカーは楽しかったけれど本当に疲れました。

物が不足している中で、物に飢えている子供達の現状、様々を見て、ショックを受けながらも、そんな環境で一生けん命、自分を律してために生きる、生きようとする子供達の姿に涙がでるほどでした。神様の下に地球の表の側の子供達を兄弟姉妹として見ると、とてもいとしくかんじました。

六十ｃｍもの深さの穴を、マウンドを作る前に掘っていたなんて気付かなかったし、それを沢山やってくれていた現地の人には感謝です。』

渡邊安信

『空が見たことのない広さでとても美しかったです。ディアナで、朝三時半位に夜空を見た時、星がこぼれるくらい空一面にちりばめられていて、すいこまれそうでした。朝日も夕日も、刻々と変わっていくグラディエイションがとても芸術的でした。本然の創造世界というのは、こんなにも愛に満ちたものなのだと感動しました。』

田中咲月

ソーラン節を披露

炎天下、サッカー

世界遺産イグアスの滝訪問（アルゼンチン）

レダではボートからのピラニア釣り、乗馬もたのしみました。

日本移住地ラパスを訪問、四年前、日本人でありながら、パラグアイの国の大統領特命大使として、九月まで日本で責任を果たして来た田岡氏の家を訪問し、開拓当時の話を聞きました。

パラグアイ、エンカルナシオンにある世界遺産、トリニダードを訪問し、ガイドの方から説明を受ける。一七〇六年からイエズス会の修道僧がインディオの生活と教育のために作った集落で、三〇〇〇人以上のインディオが生活し、一四〇〇〇頭の牛まで飼っていたとのこと、驚きでした。

レダ開発十周年記念行事

九月十七日から二十一日までエコツアーも兼ね現地レダにて十周年記念集会が行われ、日本から十四名、アメリカから六名、パラグアイから七十名が参加します。

二十五人乗りの飛行機がアスンション＝レダを往復します。

南北米福地開発協会会員の募集

南米、パラグアイパンタナール地域への植林活動を通じて生態系の維持と強化を促進し、その地域をモデルとし、世界に環境保護の大切さを訴えています。

会員は月五〇〇円、毎月、パンタナール通信を送ります。また、各種のセミナー、エコツアー等の案内をいたします。

南北米福地開発協会　事務局
〒二一三－〇〇〇一
神奈川県川崎市高津区
溝口三－十一－十五
岩崎ビル四Ｆ
電話　〇四四－八二九－二八二一
Ｆａｘ　八二九－二八二〇
会費納入　郵便口座
一〇一八　〇－七七六八〇四七一
代表　柴沼邦彦
E-MAIL　office@asd-nsa.jp
ホームページ　http://www.asd-nsa.jp